

# 生得の原理と観念の否定について

——真知の根底——

後藤愛司

## The Negation of the Innate Principles and Ideas —— The Foundation of the Knowledge ——

Aiji GOTO

### summary

The purpose of this paper is to analyze the Book I of “An Essay concerning Human Understanding”, the main problem of which is whether the innate ideas exist or not. I think that Locke’s considerations on this problem are in fact “a method” of establishing the foundation of the knowledge, that is to say, his various arguments on the innate principles and ideas aim at finding the foundation on which our knowledge is depending. Therefore, in my point of view, Locke seems to have intended to getting over the philosophy of substance such as Descartes’.

At the result of my analysis, it becomes clear that the foundation of our knowledge is not *res cogitans* as “active substance” or ESPRIT, but the force of perception as “passive faculty” of the mind.

key words : J. Locke, innate idea,

### 1. 『人間知性論』の方法

A) 本論文は John Locke の主著『人間知性論』第1巻の内容を明らかにすることを目的としている。私は、これを彼の『人間知性論』全体への方法論および原理論と見なす。すなわち、ここでは、『人間知性論』を構築するための方法が提示され、その方法に基づいて、「観念学」がそれによって成り立つ原理が確立される。いいかえれば、観念学の基礎の確立へ到る道程が示されていると思われる。

そこで、まず、彼の方法とその目的が問題になる。この場合の方法は、一貫性と明確さを備えていなければならない、同時に、目的にかなうものでなければならない。目的と方法は緊密な関連性を持っているのである。さらに注意すべきことは、学の体系の構築を最終目的とするからといって、この方法が、最終的に成立するはずの体系それ自身を、最初から前提とすることはできないという点である。学が体系性を備えている限り、その成立根拠としての「確実なる原理」が必要であり、この原理は、他の原理に依存しない絶対性を備えていなければならない。そして、この確立された原理に基づいて、

学は展開されなければならない。そこで、原理の確立こそが第一の目的となる。さらに、その目的達成のための方法はいかなるものでなければならないかが、最初の問題となる。

B)『人間知性論』の方法について考える場合、「事象記述の平明な方法」(the Historical, plain Method)と「物性的考察」(the Physical Consideration)の差異について明確にしておく必要がある。事象記述の平明な方法とは、Lockeが自らの方法として選びとったもの、物性的考察とは彼の排除した方法である。第1巻冒頭で、物性的考察についてLockeは次のように述べている。

「今のところ、私は心の物性的考察に立ち入らないだろう。すなわち、心の本質はどこに存するとか、精気のどんな運動あるいは身体のどんな変化で何かの感覚を感官によって持つようになり、あるいは、何かの観念を知性に持つようになるかとか、また、その観念はその形成されるにあたってどれかもしくは全部が物質に依存するかどうかとかそうしたことの検討にわずらわされたいだろう。」<sup>1)</sup>

物性的考察という名称を使って、Lockeの考えている内容は、一つは、本質に係わる考察、もう一つは自然科学的説明のような因果論的考察のことである。

本質に係わる考察は、現象論的立場を二次的なものとして、おとしめる。伝統的哲学の現象と本質の二元論においては本質が現象に先立つからである。

一方、因果論的考察についていえば、現在は心的事象の確実性を問題にしているのであるから、心の作用の原因を考察することになる。心の中で起こる事柄の原因が物質的存在の作用によって説明される時、本来は心の認識対象である物質の世界によって、当の心を説明することになり、心の原因は心の対象であるとする論理矛盾を犯すことになる。

事象記述の平明な方法とは、この物性的考察とは対称的な意味に解される。すなわち、「人間の識別機能(discerning faculty)がその取り扱うべき対象にたずさわる場合の、その識別機能について考察」<sup>2)</sup>する事である。この考察は本質に係わる考察ではない。つまり、心の本質を問題にしない。心の現象すなわち心の機能する様を記述するに留まる。また、心の作用の原因を考察することもない。心の働く物質的基盤や、脳と神経組織を介する物理作用の問題は、排除される。心を実体としてではなく機能としてとらえること、機能の働く姿を記述すること、問題をこのことに限定するのがLockeの意図である。

C)『人間知性論』の本来の目的は、「人間の真知の起源と絶対確実性を探求し、あわせて信念(belief)臆見(opinion)同意(assert)の根拠と程度を探求することである」<sup>3)</sup>

ここでいう起源の問題を物性的考察によって脳髓や身体の問題と解してはならない。心の機能の起源を、心が把握すべき対象によって説明することは、論理の循環に陥ることになるからである。したがって、真知の起源は、心において、心に直接見いだされるものにおいて解明されなければならない。同時に、心とは何であるかをその本質において限定する本質的規定を前提してはならない。このような本質的規定の妥当性こそLockeがここで探求したい事柄、すなわち、彼の探求の対象であるからで

ある。見いだされるべき結果を最初の探求の基盤にすることは、やはり論理の循環を犯すことになるからである。

以上の方法を前提において、Locke は真知の起源の探求に向かう。そこで最初の問題は、心の最も純粋な機能を発見することである。つまりあるがままの心の働きを考察してそれを最も基本的な機能まで純化すること、すなわち、心に本来備わっているもの、あるいは心の機能の働く基本的原理となるものと、心の機能において成立するもの、あるいは心の機能の結果としての知見を区別し、前者を発見するまで、徹底的に一般の人々の心の中に見いだされる先入見を解体して行くことである。これが『人間知性論』第1巻「生得思念について」において、Locke の追求した問題であった。

## 2. 生得原理の批判

A) 問題の「生得思念」とは何か。Locke は第1巻第2章冒頭で、生得観念があるとする説を次のように述べている。

「いったい、知性にはいくつか生得原理 (innate Principles), ある原生思念 (primary Notions), 共通観念, いわば人間の心に捺印された文字 (ないし刻印) があって、靈魂はそもそもの在り始めにこれを受け取って、世に携えて来るといふのはある人々の間で確立された説である。」<sup>4)</sup>

原生思念というのは生得観念と同じものだと考えてもよい。後にみるように生得原理は観念に環元されるから、究極の問題は、生得観念の有無である。しかし、その問題は後で扱うことにして、ここではあくまで、Locke の叙述に沿って、生得原理から問題にしよう。Locke は第2章では理論的原理の生得性、第3章では実践的原理の生得性を中心問題として取り扱っている。この論文では、理論的原理と呼ばれるものを検討することにする。

(実践的原理は、キリスト教倫理、自然法、人間の自由の問題等と関連しており、これらの問題は、Locke の倫理思想の検討において、統一的に論ずるべき問題と考えられるので、あえてこの論文では扱わない。ただし、生得の実践的原理の批判の中心問題は理論的原理の問題と一致している。また、人間の心の機能の基本的原理を探求するという課題に答えるためには、理論的原理の検討で充分だと考えられるからである。)

B) Locke が生得な理論的原理と考えられているものとしてあげるのは、おもに次の二つである

① 「およそあるものはある」「同じものがあってあらぬことはできない」という論証の基本原則、「同一律」と「矛盾律」

② 数学の論証における公理

①は論理上の公準であり、②は数学上の公準であるから、ともに公準として一括して扱ってもよからう。確かに、これらのものはあらゆる論証的あるいは数学的知識の基盤であり、あらゆる命題が成り立つための原理として万人に賛同されている。生得命題があるとする論者はこれらの原理こそ生得であると考えていると Locke はいう。このことを彼は「普遍的賛同 (universal consent) の故に、これらは生得命題である」という意見に集約する。

これらの原理の真理性を Locke が認めないわけではない。ただ、普遍的に賛同されるものが生得的なものであること、言い替えれば全ての人々の心に本来備わっているあらゆる真知の基盤であるという考えに反対するのである。

ところで、何故生得の原理が最初に問題とならなければならないのか。

C) Locke が目指すのは真知の起源とその絶対確実性の理論的基礎である。これを発見するための方法として生得原理の問題が取り上げられているのではなかろうか。

さて、Locke 以前において、Locke と同じ問題、すなわち、堅固な学問の基礎を発見するための方法を問題にしたのは、Descartes である。

Descartes は、確実な学問の基礎を見いだすために、少しでも疑わしいものは偽であるものと見なすことによって、全ての知識の基となる最も確実な原理を発見する方法をとった。外部感覚からはじめて、内部感覚、論理的・数理的知識にいたるまで、全てを偽であるとして退け、最終的に、思惟する存在者の存在に致達する。ところが、思惟は観念を介して行われる。もし観念が外部感覚や内部感覚をとおしてもたらされるならば、観念の確実性は、方法的懐疑によって本来否定されている。その場合、*cogito* する存在にとって、思惟の真理性の確証は、生得観念としての「完全性の観念」を通して、いいかえれば、「神の存在証明」を通してしか開かれなくなるのである。

また、Descartes の場合、実は、このような思惟する存在への還元のプロセスで、重要な問題が残されてきた。それは、論理と数理の確実性を否定するとき、「悪しき霊、欺く神」という奇妙な仮定を持ち出さざるを得なかったことである。論理と数理の基礎は、Locke のいう公準としての同一律、矛盾律である。同一律、矛盾律が根源的原理であることを Descartes は疑えなかった。そこで、Locke なら決して認めることの出来そうにない「欺く神」という強引な仮定を必用としたのである。

このように Descartes の方法と比べてみると Locke のいう生得観念の問題性がはっきり分かる。公準として現される論証の基礎原理、思惟する実体としての精神に内在する生得観念、この二つこそ Descartes の原理の弱点として Locke には意識されていたに違いない。Descartes の方法的懐疑が確実なる基礎を見いだしたとは Locke は思っていない。論理と数理の公準、および、なんらかの生得観念を認める限り、それらの確実性は人間の知性の限界を越えるものになってしまう。もしも、Descartes の限界を突き破って、これらの生得観念をさらに原理的なものにまで還元出来れば、Descartes の *cogito* を乗り越えて、より一層根源的な原理にまで遡ることになるはずである。

D) ここで公準としてあらわされる論証の原理について問題を整理しておこう。第4巻第7章において、Locke は公準についての既成の観念をスコラ的思想に基づくものとして次のように理解している。

「次には、これらの一般に受け入れられた公準が私たちの真知の他の部分にどんな影響を持つかを考察しよう。学園で確立された規則、すなわち、全ての推理 (Reasonings) は前に知られたものと前に認められたものから (*ex praecognitis et praeconcessis*) は、これらの公準に他の全

ての真知の根底を置いて、それらの公準を前に知られたものと想定しているように思われる。その意味は次の二つのことだと私は考える。すなわち、第一、これはの公理は心に最初に知られる真理であるということ、そして第二に、これらの公理に私たちの真知の他の部分は依存していること。』<sup>5)</sup>

この前に知られたものに基づいて新しい命題が論証されるというのは演繹推理の原理である。Aristoteles は『形而上学』において、矛盾律を取り上げ、これをあらゆる原理の中で最も確かな原理として、「その論証を要求できないもの」(4巻4章)とした。論証を要求できないのは、Locke も述べたように、他の真理がそれに依存している最初のもは、他の真理によって根拠づけるわけにはいかなからである。そこでこれらの公準は論証抜きで一般的賛同を常に得ることになる。

しかし、Locke は「前に知られたもの」つまり、論証の過程に置いて大前提となる原理は、真知の獲得における最初の原理ではないと考える。いまここでは、一切の推理や真知の根底を求めているのであるから、公準が推理や真知を生み出すものでないこと、逆に、公準が成立する基礎となるものがあって、公準こそ、その根底的基盤から生み出されることを証明出来れば、Descartes の思惟する存在つまり思惟実体をさらに原理的に支える真知の起源に到達できると考えられる。

E) Locke は、公準が普遍的賛同を得ること自体を否定はしない。Locke のいうのは、普遍的賛同自体が、公準の生得性、言い替えれば、人間の思惟に内在的に存在する原理だということの、証明ではないというに留まる。

「この普遍的賛同からする証明には次のようなぐあいの悪い点が存する。すなわち、たとえ全人類の合意する若干の真理のあることが事実において真だとしても、もし人々が実際の賛同しあう事物の場合にあの普遍的合意に到達できる道をなにか別に明示できるとすれば、普遍的賛同はそれら真理が生得であることを証明しないだろう。」<sup>6)</sup>

ここで、Locke は問題を、論証の次元から、真知の獲得の問題へ、つまり、真知の起源論へと移行させる。これは、論理の問題の知の起源の問題へのすりかえである。しかし、生得論者は論理の問題を起源の問題と同一視しているのであるから、普遍的賛同を得た命題が、人間の発達段階におけるある知的操作の過程の結果であること、すなわち後天的なものであることを証明すれば、公準の生得性は否定できる。そこで、普遍的賛同を得るような公準の成立過程を示せば、つまり、公準のような一般命題がそれに先行する知見と省察から生まれることを説明すれば足りる。

Locke の具体的事例をあげての反論は以下のとおりである。

- ① 子供や白痴は公準を理解しない。
- ② 理知(reason)を使うようになると公準が発見されるとする意見については、公準が最初に知られる真理であり、その論証を要求できないものとする、公準の定義に違う。さらに理知は生得の原理ではなく人間の機能であるし、その上、理知を働かすためには、ある年齢に達することを要する。
- ③ 理知を使うようになる時期と公準を発見する時期は違う。

公準の生得性はこのようにして否定されるが、前述したように、この証明は公準が人間の誕生以後

の発達の過程で後天的に獲得されるものだというに留まる。

F) しかし同時に、公準が後天的に得られるとする事実を基にした反論以外に、彼の観念学の基礎を見出そうとする方法と密接に関連する反論が展開されている。公準の構成要素を問題とする見地である。これは第4章「理論的と実践的の双方の生得原理に関する考察」の冒頭において述べられる。

「生得原理があると私達を説得しようとする者が原理を総体的にまとめて取り上げずに、それら[原理を表す]命題が作られる諸部分を別々に考察したら、あれほど早まって原理が生得だとは信じなかつたらう。なぜなら、そうした真理を作り上げる観念が生得でなかつたら、観念から作り上げられる命題が生得であることはできない。いいかえれば、命題の知識が私たちに生まれながらあることはできないからである。」<sup>7)</sup>

公準は言辞的命題である。ところが事実として、言辞は生得ではない。しかも一般的な公準は、一般抽象観念からなるから、生得説が成り立つためには、一般名辞の表す一般抽象観念が生得である必要がある。ところが「この一般抽象観念は人々が理知を使うようになった後まで心に形成されない」<sup>8)</sup>のである。このようにして公準の生得性は、抽象観念がそれによって成り立つもとの観念の生得性の問題に帰着する。本来「命題のかかわる観念が生得でない限りどんな命題も生得であるはずがない」<sup>9)</sup>からである。

それはさておき、ここでは、言葉(言辞)、観念、抽象をめぐる問題が、主題として浮かびあがって来る。「これらは生得か、それとも、生得ではないのか。これらが生得ではないとしたら、その内、何が人間の認識にとって根底的か」という問題である。

まず、「心が様々な真理をえる手順」について、次のような記述がある。

「まず初め、いろいろな感官が個々の観念を取り入れて、それまで空いていた部屋(the yet empty Cabinet)へ備え付ける。そして心は観念のあるものにだんだんなじむので観念は記憶に宿り、これに名前がつけられる。その後さらに進んで、心は観念を抽象し、一般名の使用をだんだん学ぶ。こうして、心のその推論機能を行使する材料である観念と言語を備えるようになる。」<sup>10)</sup>

これは『人間知性論』の全構成の見取図ともいべき記述である。この中で、抽象作用、命名作用、記憶作用といった心の機能がはっきり取り上げられていることを確認しておこう。生得の原理を否定するからには、それらの原理が、その基礎となるものから後天的に作られると考えざるを得ない。そこで、これら公準のような原理を最終的に作りあげる作用(あるいは推論の機能)と、その作用が働く対象(あるいは材料)の二つの側面の、両面にわたる、より根底的なものが探求されねばならない。ここで、対象の側面において、つまり、それら推論の機能が行使される材料として、観念と言葉が、浮かび上がる。観念と言葉はどちらが根底的か。

G) 言葉と観念を Locke は、はっきり区別する。まず、観念が後天的に得られたものであることを述べた後で、Locke は次のように書いているのである。

「こうして得られた観念で、心は、記憶を少しでも使うとすぐに、いいかえれば観念を把持し利

用する (retain and receive) ことが出来るとすぐに、ある観念は一致して他の観念は違うと発見する。しかしその時であるにせよ、ないにせよ、次の点は絶対確実である。すなわち、それは、言葉を使用するあるいは理知の使用と普通呼ばれるようになるずっと前である。というのは、子供は話せる前に甘いという観念と苦いという観念の違いを知り、それは後になって、(話すようになるとき) にが蓬とぼんぼんは同一物でないことを確実に知るのと同じである。]<sup>11)</sup>

このように、言葉に対する観念の根源性は、事実の問題として、明確であると Locke は考える。言葉は、ある意味では観念の記号であるが、その反面、観念は言葉の意味を構成するものとして、言葉から抽出された部分的意味であるとも考えられる。つまり、言葉と観念の関係は、相互的に規定されるものだとする立場も可能なのであるが、そうした言語と観念の一体観をとらずに、言葉は、観念に対する心の機能の働きの結果、二次的に、形成されるとする立場をとるのである。このようにして、生得性をめぐって展開される Locke の探求は、観念の生得性の問題へ焦点をあわせるにいたるのである。

### 3. 生得観念の批判

A) 第1巻第4章「理論的と実践的と双方の生得原理に関する考察」は観念の生得性を扱っている。ここでは、同一性、全体と部分、神、実体等の、一般に生得であると考えられてきた諸観念が検討される。Locke がこれらの生得性を否定する論法の一つは、それらの観念が、根底的な観念でないことである。例えば、全体と部分 (Whole and Part) という観念に関して、次のように述べている。

「(これらは) 完全に关系的であって、これらの観念が本来直接に属する実定観念 (Positive Ideas) は延長及び数であり、全体及び部分はその関係にすぎない」<sup>12)</sup>

全体と部分の観念は関係概念であって、関係づけられる観念があって初めて関係の観念は成り立つ。したがって、生得と考えられた観念が他の観念によって根拠づけられているのだから、生得であるかどうかの問題は、必然的にその根拠づける当の観念の生得性の問題に移行することになる。

「だから、全体と部分が生得観念なら、延長と数もまた生得観念でなければならない。というのも、関係が属している事物、それが根拠づけられている事物について少しの観念を持たずに関係の観念を得ることはできないからである。」<sup>13)</sup>

このように観念の生得性の探求は、観念の階層性の認識に行き着く。ある階層において存在している観念がそれを基礎づける観念によって成り立っている時、それは、二次的な観念であって、生得性は、その基礎づける観念の問題となるのである。最終的に諸観念を基礎づける観念はなにか、それは単純体として、それ以上区別できない観念、すなわち、単純観念であるということになる。

そのほか、神の観念、実体の観念はともに複雑観念であり、これが単純観念の集成として考えられるという点に関しては、既に「ロックの空間概念について」「ロックの力能概念について」(I), (III) の中で述べたので本論文では繰り返さない。

B) もう一つの生得観念批判は「人類の事象記述 (the History of Mankind)」<sup>14)</sup> と呼ばれる、民俗

誌的事実に基づく反論の提示である。例えば、第1巻第3章9節、11節にみられる道徳原理の多様性の記述、あるいは、第1巻第4章8節、12節、15節、17節に於ける、神の観念の多義性は、これらの観念が生得でないことを実証している。一般に生得とみられる観念に多義性があることは、それらの抽象的複雑観念の形成において、文化的差異に見合った、多様な観念形成機能が自由に働いていることの証拠である。この多様な観念形成機能を、Lockeは「知性の機能」としてとらえる。つまりその機能が働く対象としての観念は機能の働きに相応じて成立するものであるから、生得ではない。生得と見えるものは、たまたま、全ての人々の心に早く受け入れられたものにすぎない。

「結論すると、ある観念は全ての人々の知性に進んで姿を表す。また、ある種の真理は心が何かの観念を命題に整えるやいなや、その観念から導き出される。他の真理は、観念を順序よく系列に並べ、正しく比較し、注意深く演繹して、初めて発見でき同意できる。(中略)実際、観念のあるものは、他のものに比べて、私たちの諸機能へ即座に姿を表し、そのため、いっそう一般的に受け入れられる。とはいえ、これもまた、私たちの身体の諸器官と心の機能その時々を使い方に応じてなのであり、というのも、神は人間にいろいろな機能・手段を、すなわち、用い方に応じていろいろな真理を発見し、受け入れ、把持する機能・手段を備えたもうたのである。人類の思念の中に見いだされる大きな違いは、人間が彼らの諸機能を使う仕方の違いからくる。」<sup>15)</sup>

この機能の正しい使い方こそ、『人間知性論』の主題である。しかし、ここ第1巻ではまだその問題は、主題として取り上げられていない。機能が働く根源的な場を確認すること、機能の対象としての最も原始的な観念は何かを確認することが先だからである。

#### 4. 真知の根底

A) 生得原理の批判の過程で、Lockeはあらゆる原理や公準が生得ではないことを確証した。しかし、この事のみが目的であったとは考えにくい。人間の事象記述に基づく事実の集積を一見しただけで、それらの生得性が否定されることに疑いの余地はないからである。ならば、生得性の問題は、事実問題ではなく、人間が如何なる真知を得られるかについての、根源的権利の確立の問題とみななければならない。つまり真知の根拠を探求するための方法としての生得性の批判であったと思われる。第1巻第4章末尾において、Lockeは次のように述べている。

「ここにおいて、知性がどの様に進むかを明示することが、これからの論議の意図である。その際私はつぎの事を前もって言うておいた。すなわち、私たち自身の真知について私たちが持つことの出来る思念を確立するための根底、私が唯一の真なるものだと考える根底への道を明確にするために、生得原理を私が疑わねばならなかったその理由を説明することが私には必要だったのである。(中略)が、この論議のこれからの部分では、私自身の経験と観察が私を助けてくれる限り、均質で首尾一貫した建物(an Edifice uniform, and consistent with it self)を建てたいと意図しているので、借り物やもらい物の根底を頼りにしてつかい棒や控え壁でそれを支える必要がない、そんな基礎の上にそれを建てたいと私は思う。」<sup>16)</sup>

この記述は、Lockeの生得性の批判が、Descartesの方法的懐疑に相当すること、すなわち、Locke



の観念学全体を支える原理の探求のための方法であった事を明らかにしている。では、その方法を通して確立された原理とは何か。

B) これまでの検討を通して次の二つの事が明らかになったと考えられる。

- ① 原理は命題として表され、命題は基本的には観念からなり、観念は階層性を持ち、最終的に諸観念を基礎づけるのは単純観念である。
- ② 観念に対して働く諸機能が心にあることは疑えない。生得性の批判を通して問題となったのは、識別の機能、理知の機能、命名機能、記憶機能、複雑観念の形成機能等である。

②の心の諸機能は生得であるかという問題については、あるものは一定の年齢に達しないうちは現れないから生得とはいえない。また、機能は何物かに対する働きかけであるから、対象が存在することが機能の成立の条件となる。その対象とは、複雑なものから単純なものまでの多様な観念である。原理的には、観念のないところに機能はない。また、機能のないところに、観念は確認できない。①の観念と②の機能はお互いに条件づけられている。そこで、知性が成立する根底には、観念とそれに働く機能の両者の存在があると考えざるを得ない。

そこで、次に二つの問題が生ずる。一つは、心の機能の中で、最も基本的な機能、他の諸機能の働く条件となるような機能は何かということであり、もう一つは、観念の中で最も基本的なものである観念は何であり、またそれは生得であるかという問題である。

C) 後者の問題に答えることは簡単である。最も基本的な観念は、それ以上区別できない単純観念である。そしてまた、いかなる観念も生得ではない。観念の源泉は感覚と内省である。

しかし、前者の最も基本的な機能については微妙な問題がある。Locke は第2巻第6章「内省の生得観念について」において、最も基本的な機能として、「知覚あるいは思考すること (Perception or Thinking)」と「有意あるいは意志すること (Volition or Willing)」の二つをあげて内省の単純観念に含める。

「最も頻繁に考察されるし、きわめて頻繁なので、誰でも、好めば自分自身の内に覚知出来る、心の二つの大きな主要活動は次の二つである。

知覚あるいは思考すること

有意あるいは意志すること

思考する力能は知性と呼ばれ、有意の力能は意志と呼ばれる。」<sup>17)</sup>

これ以外の諸機能は、すべて、この両者の一部をなす機能か、それとも二次的なものである。例えば、観念を把持し、識別し、比較し、抽象するためには、その前提として、観念の知覚がなければならぬからである。

ここで、Descartes のもっとも基本的な原理である cogito について考えてみよう。Descartes は、思惟を次のように考えている。

「私は、思惟という語で、我々が意識しているときに我々のうちに生起する働きの全て——ただ

し、その働きの意識が我々の中にある限り——を意味する。したがって、理解すること、意志すること、想像することばかりでなく、感覚することもここでは思惟することと同じである。」<sup>18)</sup> さらに思惟の様態として次の二つをあげる。

「我々のうちにある思惟様態は、ただの二つである。すなわち、悟性の認知と意志の活動である。」<sup>19)</sup> これらの記述からみると、Descartes は、根底的な機能としては思惟、その様態として知性と意志を考えているようである。それは Locke の機能とどう違うか。Locke は知覚について、次のように述べている。

「知覚は、観念について使われる心の最初の機能だが、内省から得る最初の最も単純な観念で、ある人々によって、思考一般 (Thinking in general) と呼ばれている。もっとも、イギリス語の正しい語法では、思考は、観念に関する心の作用の中で心が能動的 active であるような種類を意味表示し、この場合、心はなにかの事物をある程度まで有意的に注意して考察する。というのは、単に生の (naked) 知覚においては、心は大部分ただ受動的 (passive) で、その知覚するものを知覚せずにはいられないのである。」<sup>20)</sup>

この「思考一般」とは、Descartes の「思惟」を意味し、ある人々とは Descartes 派の人々を指すようである。では、Locke の知覚は、Descartes の cogito と同じものなのか。

Locke もいうように、実は全く違う性格を持っている。Descartes の cogito は方法的懐疑における本来の形まで引き戻してみると「疑う、あるいは、疑わしいものを否定する」働きであり、積極的、能動的な思惟を意味している。ところが、先の引用にあるように、Locke の知覚は受動的なものであり能動的思惟一般とは対立する。内省の単純観念を、Descartes のように思惟一般としての cogito に集約せず、「知覚あるいは思考することと、有意あるいは意志すること」の二つに分けたのは、心の基本的機能における能動的なものと受動的なものとの区別に注意が払われていたからである。さらにいえば、「知覚あるいは思考すること」すなわち知性と呼ばれる力能は第2巻21章において次のように分類される。

「知覚の力能は知性と呼ばれるものである。知性の働きとされる知覚は三種類である。1. 私たちの心での観念の知覚。2. 記号の意味表示の知覚。3. 観念のあるものの中に存する結合もしくは背馳、一致もしくは不一致の知覚。」<sup>21)</sup>

このうち、2. の記号 [言葉] は観念の記号であるから二次的なものであるし、3. は既に観念の知覚を前提としている。したがって、根底的な知覚は1. の観念の知覚であり、これは先の引用にあったように、純粹に受動的なものである。

一方、意志は選択し選ぶ力能であって能動的なものである。しかしこれは Descartes のように思惟の様態ではなく、知性と並ぶ別の力能として心に属する<sup>22)</sup>。能動性とは、何かに対する働きかけであり、働きかけられるものがあらかじめなければならない。すなわち、知性の働きにおいては、その対象としての観念の存在を前提とする。だから、能動性は、「観念の受動」すなわち「心がその知覚するものを知覚せずにはいられないという事実」がなければ存立しない機能なのである。こうして、Locke の生得性の批判は最終的には観念の受動の事実には到達する。

## 5. 結 論

A) ここで、Locke が心を、白紙 (white paper) や空の部屋 (the empty Cabinet) に例えていることに注目しよう。心とは何か、それは知性の働く「場」である。しかも知性の働きの根底には受動的力能としての観念の知覚機能が存在し、この知覚機能が働くことによって、人間の全ての認識が可能になる。ここで、Locke は、Descartes の能動的力能としての cogito を越える、より根源的な場に到達する。

もし、Locke の最終原理が能動的なものであれば、白紙の比喻は成り立たなかったであろう。能動的な作用は何物かが作用するものであり、その何物かすなわち作用者は、他のものに依存しないで存在する実体として、普遍的真知の根底となったであろう。そして、この場合には、心の物性的考察すなわち本質に係わる考察も可能であったろう。

しかし、自らの本質が、純粋な受動性であるものは、必ず外部からの力能を必要とする。自らの存在を確認するものが、自己自身の内にはなく、ただ、外部に対する受動性でしかない。このような心のあり方は「白紙」以外のいかなる比喻によって表現できようか。そこに、観念がもたらされ、そこで様々な機能が作用する場こそ、知の根底としての心であり、その心に起こる最も基本的な出来事を Locke は「経験」と呼ぶのである。

B) さて、次に、この白紙としての心、純粋受動性の場に身をおいて、そこに出現する登場人物[文字] (Characters) の姿を記述するつもりになってみよう。すると、そこには様々な観念の戯れが一望できるはずである。この観念の戯れにたいして、あえて強引に、自分の持つ世界認知の図式を押しつけて解釈すれば、そこには、能動的な機能として、観念に対して戯れかかる思惟あるいは悟性の機能と、それに応じて様々な離合集散をくりかえす観念群を区別できるかも知れない。だが、この区別は根底的なものであろうか。

この能動的機能はどこから登場してきたのか。それは、白紙である心が生み出したものではない。受動的機能は能動的機能を生み出すことはないからである。(Locke は、これを神が人間に与えた力能であると答えるであろう。) では、観念の方はどうか。観念もまた心に外部からもたらされるのである。このように、心の純粋受動性においては、機能も観念も共に心に外在するものである。すると、先の能動的な機能と受動的な観念を区別する図式は、心の根底にある図式ではなく、むしろそれらの機能が、創り出した認知図式であることになる。「白紙」としての心にとっては、機能と観念を区別する根拠がないのである。だからこそ、Locke はこの機能を「内省の単純観念」の中に含めて、「心にもたらされるもの」つまり「心にとって外部の存在」を、一括して、「観念」と呼ぶことにしたのである。「観念」は、機能の側面も含みこんでいるのである。したがって、Kant が原理としたような、悟性と感性の区分が、Locke の知性論において、後景に退けられたのは、Locke の方法的根底からは、二次的な区分と見られた為である。

## 註

- 1) 《An Essay Concerning Human Understanding》edited by Peter H. Nidditch, Oxford, 1975, 第1巻第1章第2節, 43ページ [岩波文庫, 大槻春彦訳, 33ページ] これを1・1・2 p.43 [p.33] と表記する。(以下同じ。訳文はほぼ大槻訳によるが、筆者の趣味で、多少変えてある場合もある。)
- 2) 1・1・2 p.44 [p.34]
- 3) 1・1・2 p.43 [p.33]
- 4) 1・2・1 p.48 [p.41]
- 5) 4・7・8 p.595 [p.130-131]
- 6) 1・2・3 p.49 [p.42]
- 7) 1・4・1 p.84-85 [p.101]
- 8) 1・2・12 p.53 [p.50]
- 9) 1・2・18 p.58 [p.57]
- 10) 1・2・15 p.55 [p.52]
- 11) 1・2・15 p.55 [p.53]
- 12) 1・4・6 p.87 [p.104]
- 13) 1・4・6 p.87 [p.104]
- 14) 1・3・10 p.72 [p.81]
- 15) 1・4・22 p.99 [p.125]
- 16) 1・4・25 p.102 [p.131]
- 17) 2・6・2 p.128 [p.174]
- 18) 哲学原理1・9 井上庄七・水野和久訳「世界の名著」p.334
- 19) 同 1・32 同 p.346
- 20) 2・9・1 p.143 [p.201]
- 21) 2・21・5 p.236 [p.131]
- 22) ロックの力能概念について(II) [聖徳学園女子短期大学紀要第10集1984年] 参照